

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學図書館所蔵「徒然草」版本類解題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 慎吾 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002378">https://doi.org/10.57529/00002378</a>

# 國學院大學図書館所蔵『徒然草』版本類解題

伊藤 慎吾

本学図書館には『徒然草』に関連する資料が思いのほか多い。はやくに皇典講究所がいくつかの典籍を収集しており、また図書館としても時々購求してきたからである。とくに昭和六〇年代に集中的に集めており、さらに現在進行形で意識的に関連資料を集めているからでもある。以下にそれらのうち、絵入版本と注釈書の解題を記していく。

## 1 『徒然草』諸版本

(1) つれく草 元禄七年後印本 九一四・四五／四七

無刊記合一冊。四ツ目袋綴装。紺表紙。縦二六・七×横一八・五cm。每半葉一二行書。ただし本文巻頭(四才)は一行書。漢字平がな交じり文。濁点・振り仮名散見。仮名文字が多い。句読点のかわりに「。」を用いる。外題は原題簽で「□つれく草<sup>繪入上</sup>」「□つれく草<sup>繪入下</sup>」とある。上下とも角書部分を損傷しているため、判読困難である。

ただし上下両冊とも円の中、左下の文字が「附」と読める。三原図書館所蔵本によると「系圖入／読癖附」とあるから、おそらく本書も同文が記されていたものと思われる。題簽寸法縦一七・〇×横二・五cm（上冊による）。元禄七年版の後印としたのは跋文に「元禄七年迄三百四十五年に成也」という一節があること、「元禄七<sup>甲</sup>年卯」を削っていることによる。以下に全文を掲げる（下冊四六丁裏。ただし振り仮名は省略）。

一兼好は天台の学に通達し且儒経をまなび殊に老莊

の道を好み神道は尤その家なれば委其奥旨をわきまへ哥は二

条家を傳て宗とす其比浄弁慶運頓阿兼好とて和哥の四天王

とよばれし人也弘安五年に生れて觀應元年庚寅は四月八日に

六十八歳にして卒<sup>ス</sup>元禄七年迄三百四十五年に成也然は此書の始

終は儒仏老莊何れの道にも人の教となるべき所を引用して終に

己が本意をあらはすされは三教一致と心得畢竟の處は人間常

住の思ひをやぶりて無常變易の旨を觀して一部をゑらみ

残せり渴仰の思ひをなして此書を味は、現當の助とも成へし

一此書世に多といへとも又此度假名づかひ清濁口傳の読曲を

あらはし令改板者なり

月吉旦

梓行

目録題は「つれく草」、尾題は「徒然草」(上)、「つれく草」(下終)、柱題は「つれく」(上・下)。匡郭は四周単辺で縦一八・六×横二三・九cm。丁付は目録から通算でなされている。上冊は六五丁だが、ただし飛び丁があるため、

実際は六三丁である。飛び丁は次のように行われている。

三十一

①三十二ノ三(六一「御産の時」、六二「延政門院」) (六六「岡本関白殿」)

三十四

(中略)

六十

②六十一ノ二(二三「まづしき者は」) (三三「夜のおとゝは」)

六十三

下冊の丁付は五六丁だが、やはりただし飛び丁があるため、実際は五一丁である。

十七

③十八ノ廿三(三五「貝をおほふ人は」、三六「わかき時は」)

廿四

上下冊ともに巻頭目録が三段組で示されている。また上冊巻頭には「卜部系圖」を載せる。章段番号は郭外上部に記す。上冊は第一三六段「くすしあつしげ」まで。下冊は通算ではなく、第一三七段「花はさかりに」を「一」と記す。最後は第一〇八段「八になりし年」。上冊第二〇段「家居のつきぐしく」の後半、「後徳大寺のおとゝ」は特立されていない。第一一段は「神無月の比」である。

挿絵は上冊一四一四四、下冊一一面一一四、全二五面二五四。詳細は次の通り。

【上冊】

- ① 三ウ (序) つれづゝなるまゝに
- ② 六オ (二) いにしへのひじりの御代
- ③ 一一オ (八) 世の人の心まどはず事
- ④ 一五オ (九) 女はかみのめでたからんこそ
- ⑤ 二〇ウ (一九) おりふしのうつりかはるこそ
- ⑥ 二五オ (二四) 齋宮の野宮に
- ⑦ 三〇オ (三二) 九月廿日の比
- ⑧ 三六オ (五四) 御室にいみじき児の有けるを
- ⑨ 四一オ (六八) つくしに何かしの押領使
- ⑩ 四六オ (三九) ある人ほうねん上人に
- ⑪ 五一ウ (八〇) 人ごとに我身にうとき事をのみそこのめる
- ⑫ 五五オ (九二) ある人弓をいる事をならふに
- ⑬ 五九オ (一〇九) 高名の木のぼり
- ⑭ 六四オ (一三四) 高倉院の法花堂の

## 【下冊】

- ① 二ウ (一三七) 花はさかりに
- ② 八オ (一三八) まつり過ぬれは
- ③ 一二オ (一四四) 樽尾の上人道を過給ひ

- ④ 一五才（二四六） 明雲座主相者に  
 ⑤ 二四才（二五四） 此人東寺の門に  
 ⑥ 二九才（二八四） 相模守時頼の母は  
 ⑦ 二三才（一八八） ある者子を法師になして  
 ⑧ 四〇才（二〇七） 龜山殿たてられんとて  
 ⑨ 四四ウ（二一五） 平の宣時朝臣  
 ⑩ 五〇才（二三七） 丹波に出雲といふ所  
 ⑪ 五四ウ（二四四） 八になりし年父にとふて  
 昭和六二年六月一九日、本館受入。

(2) つれく草 元禄一六年刊本 九一四・四五／三五

二卷二冊。四ツ目袋綴。紺表紙。縦二五・九×横一八・三cm（上冊による）。本文一四行書。ただし、上冊第一丁のみ冒頭三行「つれくなるまゝに」から「おほかゞめれ」までを大きめに書いているため、一三行となっている。表記は漢字平仮名交じりで振り仮名、濁点を多用する。また句点を随所に付ける。匡郭は四周单边。縦二三・三×横一六・三cm。外題は「つれく草」とあるが、これは後補題簽（墨書・左肩）のものである。縦一八・七×横二・七cm。なお、北海学園北駕文庫所蔵本には「畫入つれく草」とあり、齋藤彰氏『徒然草の研究』では「新板繪入つれく草」とある。「新版／繪入」は角書。内題・目録題ともになし。尾題は上冊最終丁右下に「つれく草」とある。柱題は「つれく草」。丁数は上冊四二丁。これは丁付によるもので、実数は三七丁。下冊も丁付によると三七丁だが、

実数は二六丁となっている。つまり上冊には次のように飛び丁が見られるわけである。

十九―①廿ノ冊―卅一

同じく下冊にも飛び丁が見られる。

十九―②廿ノ冊―卅一

さらに下冊第二丁は補写であり、第三丁は落丁している。したがって、本来、一丁飛び丁で二七丁のところ、落丁のため二六丁となっている。柱刻丁付は上冊「一」〜「四十二終」、下冊「一」〜「卅七」。刊記は下冊最終丁末尾に次のように記されている。

元禄十六<sup>癸未</sup> 載子孟春吉祥日

加賀屋作兵衛藏  
荒川屋源兵衛版

版元の一つ荒川屋源兵衛は京都の書肆で、元禄前後に謡本や『古文真宝』などを刊行している。

章段番号は郭外に四角で囲んで示す。第一、二段のみ「段」を付ける。第二段以降は数字のみ。また第一八七段の章段番号を欠く。本文「城陸奥守殿泰盛は」はあるが、郭外上部に「百八七」がなく、「百八六」から「百八八」に飛んでいるのである。

挿絵は上冊が六面一五図、下冊が五面一〇図。

### 【上冊】

- ① 四才上 (二〇) 折ふしのうつり替るこそ
- ② 四才下 (八) 世の人の。心まとはす事。
- ③ 八才上 (二五) 斎王の野宮におはしますありまさこそ
- ④ 八才下 (三一) 人のなき跡ばかりかなしきはなし。

- ⑤ 一三才上（六一） 真乘院に盛親僧都とて
- ⑥ 一三才中（五三） 仁和寺にある法師
- ⑦ 一三才下（五二） 龜山殿の御池に。
- ⑧ 一八才上（六九） 筑紫に何かしの押領使
- ⑨ 一八才中（八一） 人ごとに我身に：法師は兵をたて。
- ⑩ 一八才下（八一） 人ごとに我身に：（武人琴を弾ず）
- ⑪ 二三才上（八八） 下部に酒のまする事は心すべき事也。
- ⑫ 二三才下（九三） 或人弓いる事をならふに。
- ⑬ 二八才上（一三五） 高倉院の法花堂の三昧僧
- ⑭ 二八才中（一一〇） 高名の木のぼりといひしおのこ。
- ⑮ 二八才下（一〇五） 荒たる宿の人めなきに。

## 【下冊】

- ① 四才上（一四〇） 祭過ぬれば
- ② 四才下（一四三） 悲田院の堯蓮上人は
- ③ 八才上（一四八） 明雲座主。相者にあひ給て
- ④ 八才下（一五六） 此人東寺の門に雨やどりせられたりけるに
- ⑤ 一四才上（一七三） 貝はおほふ人の。
- ⑥ 一四才下（一七七） 世には心えぬことのおほきなり。



⑦二〇才上（一八六）相模守時頼の母は。松下禪尼とぞ申ける。

⑧二〇才下（一九七）或人久我繩手を通りけるに。

⑨三四才上（二一五）御前の火爐に火ををく時。

⑩三四才下（二〇九）龜山殿たてられんとて。

本文の随所に墨書書入れが確認される。また、鉛筆書きでの校異などもなされている。以下にそれらを記す（冒頭「・」は便宜付けたもの）。

【上冊】

(1) 第一段行間（墨書）いでや

・事物ゴトニツ、シミ思フテ應接スルトキハ心ニ主アル故ニ悪ミオトシ入レラレズ  
信者タリトモ人欲アル故ニ其言必シモ是ナリトノミモ定メガタシ

・又ワレラモ人ヲ責ムルニモカリノ如シ只聖書ノ言ノ外己意ヲ交エル勿レトシルベキナリ

(2) 第一段郭外上（鉛筆書）

・コ、ヲ十段ト続ケミル説ハ非ナリ

カヤウナル処ヲ二段ニミル例木の云々ノ処ニモアリ

(3) 第二段行間（墨書）風も

・心目ヲ以テ心裏丹田ヲ見テ天国ヲ知り神ニ交ルベキナリトナリトナリ

(4) 第二段文末

・人はたゞけふのみとこそおもふへけれきのふはすぎつあすはしられずゲニ今ノナスベキ理ノアル職分ヲナスベシ

(5) 第六一段行間 (墨書) 真乘院

・都ニ育チシモノ田舎ニテ世ニ交ルハ甚ダ不便ニシテ永住シガタキモノナリ

(6) 第八一段文末 (墨書) 人ごとに

・神ハ心ニアル故ニ前ニ在リト思フハ耳目等ニウバ、ル、ナリ後口ニ天ヨリ宿リ玉フト思フガ腹心ニ在ルナリト云フナリ

(7) 第一一四段文末 (墨書) 四十に

・一事物ヲクリカヘシテ思フタリトリカヘシノナラヌヲ思ヒワヅラフハ君子ノナサズル所口ナリ

(8) 第一三一段文末 (墨書) 物ニあらそはず

・礼記<sup>ニ</sup>貧者ハ貨財ヲ以テ礼トセズ老者ハ筋力ヲ以テ礼トセズ

【下冊】

(1) 第一三九段行間 (墨書) 花はさかりに

・天下ノ理陽ノミニシテ陰ナキコトアラハズ苦樂並ビ行ハル、ノ理ヲ知ル故ニ窮シテモ守ル処ヲ失ハザルナリ悲シ(ム脱カ)ベ

キハ悲ミ 喜ブベキハ喜ブトイヘドモ喜怒物ニ在テ己レアツカラザレバ火氣ノ動ナク 躰オ自ラユク

・天地万物吾一躰ナル故ニ士氣ニ必ズ成ルトオモヘバ成ルナリ コマルト思ヘバナラズ オノレガ意ニ應ゼザルコト

モ士氣ニ意ノ如ク應ジタリト思ヘバ 應ジタルニテ惡テコマラスルアタハズ

・五官メ、ミ、ハ、ナ、ク、チ、ハ、ダ、ヘニフレテセイタスルハ皮フノシマルユエナリ イカナル事物ガフレテモ心ニ清物フル、ノ思ヒアリ

テイヤカラズコマラズ オルトキハ皮膚シマリタル故邪氣病氣犯スアタハズ コノ氣中ヨリ生ズルナリ。神心一躰ナル故ナリトナリトナリ

(2) 第一七一段文末 (墨書) 何事の

・フカク陰<sup>カク</sup>レタルノ理ヲタツネヌハ力<sup>チカ</sup>ラノ及バザルニ思ヒワヅラヒ或ハ其道ナキニ力<sup>チカ</sup>ヲ費シ思ヲワヅラハスルニ精神ヲ消スノ道ニシテ聖經ノ眞理ニアラハストシルベキナリト云フベシトナリ

(3) 第一八六段文末 (墨書) 相模守

・心ハ人ノ神明衆理ヲ備ヘテ虚靈ニシテクラカラズ万事應ズ

(4) 第一八七段文末 (墨書) 城陸奥守

・心内ヨリツヨク正クシテ血氣ヲ養フベシ血氣ヨリ心ヲヤシナフベカラズ

(5) 第二三三三段行間 (墨書) 園の

・ツネニ分子皮膚ノシマルヤウニ曰者ニムカヒテハヒマアラバウチワヅラヒ等ヲナシテヒフノ分子ヲ シメオクベシ邪氣ニ病毒ノ染入ヲ防除スルナリオノ、グトキハヒフノ分子 ソウケダツユエオノ、ギオソルベカラズトシルベキナリトナリ

(6) 第二四七段行間 (墨書) 八に

・人ハ事物ノ成否ヲハカラズ天ノ万物ヲヤシナフゴトク自然ニ性ニ叶フヲタツトブ 不斗思ヒ得ルノ思慮ハコノ限ニアラズ フカキ思慮ハ事物ニ應接セザルトキニナルベキナリト云フトナリ

旧蔵者は最終段 (二四七) の末尾に記されているところから知られる。ただし伝未詳。

鈴木重盛讓<sup>シゲユキニ</sup>ニ一男重之<sup>ニ</sup>

なお、下冊後見返しに次の歌が記されている。

つれ／＼のめさましくさに

つむへきは

はるの木のめの

ほかなかりけり

「めざましぐさ」は『目覚まし草』を掛けるか。これは江戸前期の随筆で、『徒然草』の影響を多分に受けている作品である。

本書は次に挙げる磯田本とほぼ同版である。すなわち本文と挿絵は同じであるが、しかし、序文の有無など違う点も散見される。

(3) 新板絵入つれづれ草 元禄一六年刊本 九一四・四五／五〇

二巻二冊。四ツ目袋綴装。縦二六・五×横一八・八cm（上冊による）。紺表紙に礬砂で柳を肉筆する。匡郭は四周単辺で縦二〇・三×横一六・三cm。每半葉一四行書。漢字平仮名交じり文で濁点多め。適宜、句点を加え、振り仮名も多い。外題は原題簽で「新板つれづれ草 上(下)」とある。四周双辺、表紙の中央に貼りつけてある。縦一七・五×横四・四cm（上冊損傷甚大ゆえ、下冊による）。上冊題簽には「つれづれ草」の左側に次の文字が彫られている（□部分は損傷のため判読不能）。

内裏の圖并公家□の□□

内題・目録題ともになし。尾題は上冊だけ「つれづれ草」とある。柱題は「つれづれ草」。丁数は上冊三五丁（前見返しを含む）、下冊二七丁。上冊は本文の前に「当時禁中圖説」（前見返し一才）、上段・禁裏女房衆物書の図／下段・兼好法師図（二ウ）が加えられている。本文は続く三丁から「一」とする。刊記は次の通り。

元禄十六癸未載御幸町通二条上ル一丁目孟春吉祥日

礒田太良兵衛（摺黒印）

齋藤彰氏によると、礒田版は同年刊行の加賀屋作兵衛・荒川屋源兵衛版の重印本である（『徒然草の研究』八〇四頁）。挿絵は上下二段、もしくは上中下二段構成をとっている。上冊第一段から一三七段（くすしあつしげ）まで。下冊は第一三九段（花はさかりに）から二四七段までを収める。一三八段がないが、欠けた章段はない。

上冊九面一八図。

①前見返：禁裏図

②巻頭二ウ上段禁裏女房図／③下段（序分）兼好法師図

④四才上段（二〇）折ふしの／⑤下段（八）世の人の

⑥八才上段（二五）齋王の野宮に／⑦下段（三一）人のなき跡ばかり

⑧一三才上段（六一）真乗院に盛親僧都とて／⑨中段（五三）仁和寺にある法師／⑩下段（五二）龜山殿の御池に

⑪一八才上段（六九）筑紫に何かしの／⑫中段（八一）人ごとに我身の／⑬下段（八一）武人琴を弾ず

⑭二三才上段（八八）下部に酒のまする事は／⑮下段（九三）或人弓いる事をならふに

⑯二八才上段（一三五）高倉院の法花堂の／⑰中段（一一〇）高名の木のぼりと／⑱下段（一〇五）荒たる宿の人

めなきに

下冊五面一〇図

①四才上段（一四〇）祭過ぬれば／②下段（一四三）悲田院の堯蓮上人は

③八才上段（一四八）明雲座主相者に／④下段（一五六）此人東寺の門に

⑤一四才上段（一七三）貝はおほふ人の／⑥下段（一七七）世には心えぬことの

⑦二〇才上段（二八六）相模守時頼の母は／⑧下段（一九七）或人久我繩手を通りけるに  
 ⑨二四才上段（二二五）御前の火爐に／⑩下段（二〇九）龜山殿たてられんとて  
 なお、旧蔵者の書入が次の見返部分に確認される。

(1) 上冊後見返

此本何方へ参候共

早速御返可被下候

うら町主

河西喜左右衛門

(2) 下冊前見返

此本何方へ参候共

早速御かへし可被下候

(3) 下冊後見返

此主裏町

昭和六三年二月二九日、本館受入。

(4) つれく草 元文二年刊本 九一四・四五／四六

二巻二冊。五つ目袋綴装の布目地濃紺表紙。縦二六・五×横一八・六cm。外題は原題簽で「つれく草 上(下)」とある。四周双边の薄茶色地の小紙で縦一八・三×四・三cmのものが左肩に貼られている。匡郭は四周单边で縦

二〇・八×横一六・三cm。本文の柱刻は「〇つ上(下) 丁付」。内題・尾題ともになし。刊記は下巻最終丁左詰め、四周単辺の枠に囲まれて次のように記されている。

元文二年丁巳弥生吉日  
京寺町通松原下ル町  
 書林菊屋喜兵衛版

毎半葉一二行で漢字平仮名交じり。振り仮名、濁点が随所にあり、また句点も多い。段は各段に改行され、番号は郭外上部に囲みを設けて表示されている。丁数は上巻六三丁。下巻五〇丁。いずれも丁付による。ただし丁付には挿絵は含まれておらず、挿絵を含めると、上巻六八丁、下巻五四丁となる。つまり挿絵の丁数は上冊が五丁、下冊が四丁である。

挿絵は上冊が一〇面一〇図で、柱刻は、本文とは別にいろは順に「〇い」から「〇へ」が記され、ついで下冊は八面八図で「〇へ」から「〇り」が記されている。挿入箇所は上冊①い四・五の間オ、②四・五間ウ、③ろ十四・十五間オ、④十四・十五間ウ、⑤は二十五・二十六間オ、⑥同ウ、⑦に三十七・三十八間オ、⑧同ウ、⑨ほ四十九・五十間オ、⑩同ウ、下冊①へ四・五間オ、②同ウ、③ト十四・十五間オ、④同ウ、⑤ち二十五・二十六間オ、⑥同ウ、⑦り三十七・三十八間オ、⑧同ウで、一丁の表裏に別々の絵が描かれているかたちである。上冊題簽に朱筆で「祐信画」と加筆されているように、本書の挿絵は西川祐信が担当している。菊屋喜兵衛は他にも祐信の絵本を多く刊行している(松平進氏『師宣祐信絵本書誌』)。内容は次の通り。

【上冊】

- ①いオ(八) 世の人の心まどはず事。
- ②いウ(九) 女は髪のみでたからんこそ。
- ③ろオ(二〇) おりふしのうつりかはるこそ。

- ④ ろウ (五二) 龜山殿の御池に。
- ⑤ はオ (六二) 真乗院に盛親僧都とて
- ⑥ はウ (六九) 筑紫に。なにがしのお押領使んはといふやうなるもの、
- ⑦ にオ (八一) 人ごとに我身にうとき事をのみそこめる。
- ⑧ にウ (八八) 下部に酒のまする事は。
- ⑨ ほオ (九三) 或人弓いる事をならふに。
- ⑩ ほウ (一一〇) 高名の木のぼりといひしおのこ。

## 【下冊】

- ① へオ (一) 祭過ぬれば。
- ② へウ (八) 榎の尾の上入道を過給けるに。
- ③ とオ (一八) 此人東寺の門に雨やどりせられたりけるに
- ④ とウ (三九) 世には心えぬことのおほきなり
- ⑤ ちオ (四八) 相模守時頼の母は。
- ⑥ ちウ (五九) 或人久我繩手をとをりけるに。
- ⑦ りオ (七九) 平宣時朝臣。老の後むかしかたりに。
- ⑧ りウ (一〇二) 丹波に出雲といふ所あり。

書入は墨書、朱筆で随所にみられる。同筆である。また赤い不審紙も貼られている。仮名遣いの誤りは朱で訂正されている。書入としては次に数例を挙げる。



・つれ／＼なるよりものくるおしけれまでを一部の序文とす（上一丁才郭外上）  
 ・いでや、「此一節は大綱也（上一丁才郭外上）」

・みかどの「此二節は人のね／かひにはさま／＼あれどそれ／はいひもつくされず又いふに／もたらざれば只帝位  
 一の人／など人の品のうへはかりをか／きつらねたり此内に万のね／がひはこもりたれば也（上一段上欄外）」

・総論 此段種々ノ人ノ品ヲ評シテ品ニモヨラズノ形ニモヨラズ心ヲ賢ニ移ノサント云ヘルガ一篇ノ本意ノナリ  
 （上一段上郭外）

・此段は万ツ閑ニ觀ス／る事をいはん為に始に／月花を云ひ出して終に／は我好む所の無常の／理をあかし／佛道  
 に引入たり（下一段上郭外）

・善根「言海ニ佛教の／語善果を得べき所ノ業功德とあり（下三九段郭外上）」

右の書入に『言海』を引用している。『言海』の「善根」の項は明治二三年五月刊行の第三冊に収録されているから、この書入がそれ以降のものであることが分かる。印記には「阿部家ノ藏書印」「鳥野藏」「國學院ノ大學圖ノ書館印」などがある。このうち「鳥野藏」（朱長方印・単辺陽刻）が鳥野幸次の印であれば、これらの書入が鳥野のものによると考えられるだろう。が、『近代藏書印譜』四編に掲載される鳥野幸次の二つの印は本書に捺されたものと異なるので、検討を要する。昭和六三年六月一八日、本館受入。

（五）新板繪入つれ／＼草 元文五年版他合本 九一四・四五／三三

二卷合一冊。四ツ目袋綴装の紺表紙。縦二六・七×横一八・五cm。上冊一三行、下冊一四行。上下で行数が異なるのは、本書が別本を合冊したものであるからである。版がまったく違う取合せ本である。漢字平仮名交じり文。濁点、句点、

振り仮名を随所に付ける。四周単辺。上冊の匡郭は縦二二・二×横一五・九cm。上冊の丁数は三二丁。加えて前見返もまた文字、絵ともにある。下冊は二八丁だが、第一五丁以降、一〇丁加えて、丁付は最終丁「三十八」。最終丁は後見返である。つまり第一五丁の丁付は「十五ノ廿五」、すなわち飛び丁付がなされているのである。なお、第四丁（一四〇〜一四一段）は七丁と八丁との間にある。錯簡である。外題は後補題簽で「つれく草」（縦一八・七×横三・三cm）と墨書して左肩に貼られている。内題は「新板繪入つれく草」（上一オ一行目）、尾題はないが、上冊左下の端に「上巻終」とある。下冊にはない。柱題は上冊に「徒然上」とあり、下冊に「つれく下」とある。刊記は下冊本文最終丁に記されている。

元文五<sup>甲</sup>正月吉日 書林鼎直堂板

上冊は各章段を改行せずに示す。ただし第二段のみは改行する。また上巻最終段は「くすしあつしげ」の段である。また第一一段では後徳大寺の大臣の段を特立する。他方、下冊は段ごとに改行する。番号は匡郭外上部に示す。下巻最初の段は「花は盛に」であり、段数は一三六段である。下冊は章段数が少ないが、それは本文が抜けているわけではなく、番号を付けていない章段が多いからである。しかし一方で一段を二つに分かっている部分もあり、この点に特色をもつ。

例1 百四十七 四十以後の人

鹿茸を鼻にあてゝ

百四十八 能をつがんとする人

例2 二百廿九 すべて人は

とがあらしと思はゞ

二百三十人の物をとひたるに

挿絵は上冊が七面二三図で、下冊が四面八図となっている。

【上冊】

- ①前見返し(序) つれ／＼なるまゝに  
 ②四才上(八) 世の人の心まどはず事(画中詞「久米仙人くめのせんじん／通つうをうしなふ」)／下段(二〇) 折ふしのうつりかはるこそ

④八才上(二五) 齋宮の野々宮に／下(五五) 御室にいみじき児の

⑥一三才上(六九) つくしに何がしの押領使／下(八八) 下部に酒のまする事は

⑧一八才上(九三) ある人弓ある事を習ふに⑨下(一一〇) 高名の木上りといひしをのこ

⑩二三才上(九) 女はかみのめでたからんこそ⑪下(三三) 九月廿日の比

⑫二八才上(一三五) 高くらの院法花堂の三昧僧／⑬下(五三) 仁和寺にある法師

【下冊】

①四才上(一七三) 世には心えぬことの／②下(一八二) 相模守時頼の母は

③一〇才上(一四三) 梅尾の上人／④下(二〇四) 龜山殿たてられんとて

⑤一六才上(一五二) 此人東寺の門に(丁付「廿六」)／⑥下(一九三) 或人久我繩手を通りけるに

⑦二三才上(二一〇) 御前の火炉に(丁付「三十三」)／⑧下(二三三) 丹波に出雲といふ所あり

前見返しには「兼好法師傳記」という短文が載る。これを左に掲載する。ただし振り仮名は省略する。

つれく草の作者

けるゆへはじめて卜部の

兼好法師は大しよくくはん

姓を給はりき兒屋根

より十九世の後にて

より十八世常盤大連

右京太夫兼名の孫

中臣のはらひを欽明

兼頭の子姓は卜部也

天皇にさづけ奉りし

卜部は仲哀天皇の

より卜部の姓をあら

御宇に天兒屋根命

ためて中臣の姓をたま

より十一世いかつちの

へり

大臣龜卜の道<sub>ニ</sub>達し

また画中に次の一首が記されている。

ちぎりをく花とならひのおかのへに あはれいくよの春をすこさん

加藤喜太郎寄贈、昭和五年一〇月三日、本館受入。

(6) つれく草 享保七年刊本 九一四・四五／四五

二卷二冊。四ツ目袋綴装の紺表紙。縦二五・五×横一八・四cm。本文料紙の匡郭は縦二二・〇×横一六・三cm（上冊一オによる）。毎半葉一五行書。ただし第一丁のみ内題を含めて一四行。漢字平仮名交じり文で振り仮名が散見される。句点には「・」を使用する。濁点は振り仮名に散見されるが、本文に直接付ける例は稀である。これに加えて、旧蔵者によって随所に振り仮名が墨書されている。外題は原題簽に「つれく草」とある。これは四周双边で左肩に貼ら

れている。ただし下冊題簽は剥がれているため、表紙と第一丁との間に挿んである。内題は「つれく草」。尾題はないが、上冊巻末左下に「上終」と記されている。下冊にはない。柱題は「つれ上(下)」。丁数は上冊の口絵が二丁(丁付「口ノ一」)、「口ノ二」、本文が四二丁(丁付「一」)、「四十二」、合せて四三丁、下冊が三七丁(丁付「一」)、「三十七」であるが、しかし上下ともに飛び丁があるため、上冊の実数は二九丁であり、序分の二丁を加えれば、四一丁となる。さらに挿絵の丁である前見返を加えるならば、墨付四二丁ということになる。また下冊も実数でいえば墨付三三丁である。以下に詳細を示す。

【上冊飛び丁部分の丁付】

十二―①十三四―十五―②十六七―十八

【下冊飛び丁部分の丁付】

十三―①十四五―②十六七―十八

二十四―③二十五六―二十七

三十一―④三十二―三十三―三十四―⑤三十五六―三十七

章段は改行せずに前段に詰めて書かれている。番号は上下通算ではなく、各冊別々に付けられている。上冊章段は第一三六段「くすしあつもり」までである。また上下とも巻頭の第一段に番号は付けず、二つ目の第二段の「二」から表示する。章段番号は囲み文字で、次の四種類が見られる。

①白地に四周单边。上冊二―一三、五七、五八、一三二―一三六。

②白地に四周双边。上冊八七、八八。

③黒地。上冊一七、五〇、八一。

④黒地に四周单边。上冊一四〇一六、一八〇四九、五一〇五六、五九〇八〇、八二〇八六、八九〇一三〇、及び下冊全段。

上冊の卷末に次の文がある。

従古雖徒然之重板多世間假名遣誤依有之今又

以貞徳之写本令開板者也

上終

また下冊最終丁裏には左詰めに四周单边の枠があり、その中に次の刊記がある。

享保七<sup>壬寅</sup>歲孟陽日

大坂心齋橋筋順慶町角

書林 河内屋茂兵衛

挿絵は次の四箇所にある。

(1) 上冊前見返し全面。兼好図（文机にもたれかかるもので、序分に相当）。

(2) 口ノ一表。今川了俊と命松丸とが対面する図。団扇面図。

(3) 口ノ一裏ノ二表。巻物図。中に「つれく草三ヶの事」を記す。

(4) 口ノ二裏。兼好、百姓に米を施すの図。

印記としては本館のほか、「道修町小西伊兵衛」という朱長方印（单边陽刻）が上下冊巻頭に捺してある。小西伊兵衛は江戸後期の太坂道修町の薬種問屋である（渡辺祥子氏「薬種中買仲間と唐薬問屋」『都市文化研究』第一号参照）。上冊口ノ一オモテに記される「徒然草發端」を左に掲げる。

つれく草は兼好の作れる

書一生に秘め置かれしをめし

つかゐの小童命松丸につ

たはりしを今川了俊にまい

らせし也兼好のつくれる所

は花はさかりにの段筆はじめなり

つれく草の題号なれはとて

了俊發明してつれく成ま

まにといふ段を書初かきはしめとせし也

次に「兼好由緒」を左に掲げる。

兼好由緒

兼好法師は

天津兒屋根命の

苗裔大職冠鎌

足公十七代の末孫

吉田兼顕の三男

左兵衛佐卜部兼好

と申て 後宇多院

の北面の臣にてぞ

有ける帝崩御の

徒然つれづれの二字徒とは空くうなり

然せんは助語じよごなり世をのがれ

たる人の作れる書かみなれば

相應じやうまうのもんじ也尤寂莫

の二字もつれくくとよむ

心を觀し心をしづめて

よむべし心ふかきふかき書かみなり

後出家して兼好

といへる名字を其

まゝ法名によみかへえて

兼好法師と申せし也

和哥は二条家の門弟

にして手跡もよくせり

儒莊老の道に天台の

学をかねたり洛陽に

あそび古人の遺書を

友とす伊賀伊勢尾

こしかたの

張大和あたりを行脚

世のうきことを

し後につの國安倍

かそふかも

野に住し事あり

ねられぬ

夜述懐といへる

夜半の

題にて

鳴の羽かき

次に徒然草の秘伝とされる「つれく艸三ヶの事」を収録しているので、ここに掲げる。

○白うるりといふは盛真僧都といふ人いもがしらを

このみて師匠よりゆづられし式百貫の錢。坊

まで賣て我すける食事のために皆になしはて

たるやうなる人。しどけなけれと其徳ある道心なり

とて世の人ほめたうとみし也盛真ある法師を見

てしろうるりといふ名を付られたり人是をとふに

みづから云出せしなれども何の事ぞと我もしら

ずもし白うるりといふもの出たらはあの僧のかほに

なるべきなんとこたへられしと也何にもたとへ

がたきものをたわむれ言に云し事とおぼえ侍る

「一ウ

云出せし人さへしらざれば作者にもしるまじ是口傳



○布のもかうといふ事はしもかうといふあり是はみす  
の上に横に引はへたるきぬ也此はしもかうを布の

あら／＼しきにてしたるをいふなり帽額もかうは四月朔日より

九月九日まではかゝらずとなり

○放免ほうべんのつけものといふは東鑑廿三に言將軍実朝

つるか岡へ拝賀の時随兵の外に風流ふうりゅうをつくし

たるものありたとへは賀茂のまつりに若き随

身のかりぎぬに作り花を付たるごとくきよらを

つくしたるもの行列の外に異風のかたちにて付添

ゆくものあれとも其時ははなちゆるすといふ事にて

放免といへり法令すきに過ておもき作りものを

付たれば其人にまた人付そふてあゆみ行

を見るにさへくるしきといゝし事なり

今の世の神事練ものやうのものなりとしりぬ

次いで「兼好百姓に米施す」を左に掲げる。

兼好は三度伊賀国に居て

観應元年の春二月三日より

病床ひやうかに臥す都に其間へ

「二才

ありて 上皇より典薬

和氣清元に米穀卅石

を相添そへおくり給ひしに

死の道は桑門たるものゝ

悦所也とて頭をふつて

薬を用す件の米穀を

土民に施す病不快にし

て同十八日に卒おわんぬ

病中の詠

昭和六十二年六月十九日、本館受入。

あるかなき世のならはしも忘られて

をくるゝ身には夢かとそおもふ

なき人のこの比おほき世やさらに

つねとしらてもおとろかれぬる

享保四<sub>亥</sub>年迄二百七十年<sub>二</sub>成

(7) 絵入新板つれく艸 九一四・四五／四三

二卷二冊。四ツ目袋綴装で表紙は布目地浅縹色。縦二六・七×横一八・五cm。匡郭は四周单边で縦二二・六×横一六・九cm（上冊一オによる）。行数は上冊第一丁オモテが一四行だが、第一丁ウラ以降は一六行である。巻頭「つれくくなるまゝに」から「ものぐるおしけれ」までを序分として扱っており、第一段「いでや此世に生れて」以降を大き目に書いている。また歌は合点を付けて本文中に改行せずに取り込んでいる。表記は漢字平仮名交じり文で漢字は少なめ。振り仮名は散見される程度である。また句読点のかわりに随所に黒点「・」を付けている。表紙左肩に原題簽で「繪入新板つれく艸 上（下）」とある。单边で縦一八・九×横四・一cm（上冊損傷ゆえ、下冊による）。また上冊前見返には次のように記されている。

繪入新板

## つれく艸

江都書賈 青藜閣（印）

尾題はないが、上冊の巻末中央に「上巻終」と記されている。また版心には「つ上（下）」とある。章段番号は郭外の上部にあり、下冊は通算番号を用いている。すなわち巻頭は「百二十七」で始まる。寛文十二年山路版にはこの番号がなく、次の段を「第二」と記す。すなわち上下別々に番号が付されており、この点、延享版と異なっているわけである。丁数は上冊四四丁だが、丁付は飛び丁のために「一」から「五十一終」となっている。下冊は三六丁だが、上冊同様飛び丁のために丁付は「一」から「四十三」となっている。なお、下冊の三十丁台は「卅」を用いているが、第三七丁だけは「三十七」と表記している。

## 【上冊の飛び丁部分】

十四―①十五ノ廿一―廿二

四十六―②四十七八―四十九

## 【下冊飛び丁部分】

五―①六ノ八―②九十四―③十五六―④廿一―廿二

下冊最終丁ウラには次のようにある。

右つれく草板行元本校考全畢

尤可為證本者也

延享五歳<sup>辰</sup> 夏吉日求之

さらに後見返には次のような刊記がある。

書賈 江戸浅草茅町二丁目  
須原屋伊八

初版本は京寺町通の田中屋半兵衛が出したもののようである（齊藤彰氏『徒然草の研究』八〇六頁）。須原屋伊八版はその求版本だろう。もともと池之端仲町にあったが、文化年間以降は仲町と茅町と両町に店があったようである。本書は文化年間以降の刊行と思われる。なお、上冊見返左下、「江都書賈 青藜閣」の下に「北澤氏／青製閣／黎本記（北澤氏青藜閣製本記）」という朱正方印（单边陽刻）が捺してある。これは北沢伊八こと須原屋伊八の印である。挿絵は上冊が一三面一三図、下冊が一一面一一図である。

【上冊】

- ① 三才（序分）
- ② 六才（七） あだし野の露消ゆる時なく
- ③ 九才（九） 女はかみめでたからんこそ
- ④ 一二才（一一） 神無月の比
- ⑤ 一五才（三二） 九月廿日の比
- ⑥ 一八才（五四） 御室にいみじき児の（丁付「廿四」）
- ⑦ 二一才（六八） つくしに何がしの押領使（丁付「廿七」）
- ⑧ 二五才（八〇） 人ごとに我身に（丁付「卅一」）
- ⑨ 二九才（八九） 奥山に猫またといふ物（丁付「廿五」）

- ⑩三三才（一〇三） 大学寺殿にて（丁付「卅九」）
- ⑪三六才（一一一） 囲碁双六好んであかしくらす人は（丁付「四十二」）
- ⑫三九才（一二〇） 唐の物はくすりのほかは（丁付「四十五」）
- ⑬四二才（一二九） 顔回は（丁付「四十九」）

## 【下冊】

- ①三才（一三七） 花はさかりに
- ②六才（一四四） 梅尾の上人
- ③九才（一五四） 此人東寺の門に（丁付「十一」）
- ④一二才（一六二） 遍照寺の承仕法師（丁付「十四」）
- ⑤一六才（一八〇） さぎちやうは（丁付「廿三」）
- ⑥一九才（一八八） ある者子を法師になして（丁付「廿六」）
- ⑦二二才（二一四） 想夫恋といふ楽は（丁付「廿九」）
- ⑧二五才（二一五） 平の宣時朝臣（丁付「卅二」）
- ⑨二八才（二三一） 園の別当入道は（丁付「卅五」）
- ⑩三一才（二三六） 丹波に出雲といふ所有（丁付「卅八」）
- ⑪三四才（二三八） 御隨身近友が自賛とて（中略）二月十五日月あかき（丁付「四十一」）

以上、すべての挿絵は寛文十二年版と同じものである。

旧蔵者名は見返に墨書されており、また「岩本」という朱櫛円印（単辺陽刻）が捺されているところから、甲府在

の岩本篤三郎という人物と知られるが、伝未詳である。前田書店から購入、昭和六二年一月二四日受入。

(8) 大字新板つれ／＼草 寛延四年刊本 九一四・四五／四九

二巻二冊。四ツ目袋綴装。金泥を刷毛で横引した鏝がかつた紺表紙。縦二六・四×横一八・八cm (上冊による)。匡郭は縦二二・四×横一六・三cm (上冊一オによる)。每半葉一四行。漢字平仮名交じり文で、振り仮名、濁点、句点を多用する。外題は原題簽で「大字新板つれ／＼草」とある。四周双边で二重の枠の中に牡丹唐草文様を描いた朱題簽である。表紙中央に貼られている。縦一七・六×横四・七cm。内題・尾題ともない。版心には「つれ／＼草上(下)」とある。見返には薄墨で題・序文・版元を摺つてある。序文は次の通りである。

夫つれ／＼草は吉田兼好先師の著作にて万代の龜鑑也

男女共に平生座右に置いて熟讀すへし然るに近年板行

紙数のすへなからん事を要とし文字こまかになり見ん人

甚た勞せり今此書紙数を延し文字等改正し令板行畢

丁数は上冊が四一丁、下冊三三丁である。刊記は下冊最終丁左詰に次のように記されている。

寛延四年

加賀屋清左衛門

未 六月下旬京都書林

大和屋伊兵衛

章段番号は郭外上部に□で囲む。上冊第九一段「赤舌日といふ事」の段の後半は「或人弓ある事をならふに」の段になっている。続く「牛をうる者あり」の段を第九二段としているから、単純に段数を省いているだけであろう。上

冊最終段は「くすしあつしげ」の段で、第一三五段目にあたる。そして下冊冒頭「花は盛に」の段には第一三六段と通算番号が付けられている。下冊最終の「八になりし年」は第二三九段である。

挿絵は上冊が五面一〇図、下冊が四面八図。

【上冊】

- ①五才上（八）世の人の心まどはす事。／下（一九）折ふしのうつりかはるこそ。  
 ③一三才上（六〇）真乗院に盛親僧都とて。／④下（五一）亀山殿の御池に。  
 ⑤二〇才上（六八）筑紫に何がしの。／⑥下（八七）下部に酒のまする事は。  
 ⑦二九才上（七九）人ことに。／⑧下（九二）赤舌日といふ事。  
 ⑨三四才上（一〇八）高名の木のぼりといひしおのこ。／⑩下（一三七）祭過ぬれば後の葵不用成とて。（この段の本文は下冊にある）

【下冊】

- ①五才上（一四三）樽尾の上人道を過給けるに。／②下（二〇七）亀山殿たてられんとて。  
 ③一二才上（一五二）此人東寺の門に／④下（一九三）或人久我繩手を通りけるに。  
 ⑤一九才上（一七三）世には心えぬことの多き也。／⑥下（一八二）相模守時頼の母は。  
 ⑦二七才上（二一一）平宣時朝臣。／⑧下（二三二）丹波に。出雲といふ所あり。

昭和六二年五月八日、本館受入。

## (9) 新板繪入つれく草 無刊記絵入本 九一四・四五／四八

二卷二冊。四ツ目袋綴装で布目地の青表紙。縦二六・一×横一八・二cm。本文料紙の匡郭は縦二二・一×横一六・四cm。序・本文ともに毎半葉一三行書。漢字平仮名交じり文で振り仮名・濁点・句点を多用する。表紙左肩に原題簽で「つれく草新板上繪入」とある。四周双边で縦一九・二×横四・四cm。内題は上冊に「新板繪入つれく草」とあるが、下冊にはない。版心に「徒然上(下)」とある。尾題はない。ただし、上冊最終丁左下に

## 上巻終

とある。

丁数は上冊が三三丁である。このうち、飛び丁、又丁は見られない。また序には丁付がされていない。下冊は二九丁で、このうち、又丁が一丁ある。また、終丁は見返を兼ねている。

## 【下冊の又丁部分】

二十一①又ノ廿一廿一

章段は一段から一〇段まで数詞・助数詞を○で囲んでいる。ただし、一段以降は数字だけの囲み文字で示す。改行は原則行わない。ただし第一段から二段に移る箇所だけ改行している。下冊冒頭は諸本同様「花はさかりに」であるが、章段数は第一三九段となっている。そして全体の章段数は二四七段である。

挿絵は上冊が六面一一図、下冊が五面一〇図である。

## 【上冊】

①序ウ(一)つれく成まゝに

②四才上(八)世の人の心まどはす事／③下(二〇)折ふしのうつりかはるこそ



- ④八才上(二五) 齋宮の野々宮に／⑤下(五五) 御室にいみじき児の有けるを。  
 ⑥二三才上(六九) つくしに何がしの押領使／⑦下(八八) 下部に酒のまする事は。  
 ⑧二三才上(九) 女はかみのめでたからんこそ／⑨下(九〇) 奥山にねこまたといふ物  
 ⑩二八才上(一三五) 高くらの院／⑪下(二〇七) 高野の證空上人京へ

## 【下冊】

- ①四才上(一四〇) 祭すきぬれば。／②下(一四六) 梅の尾の上人道を過給ひけるに。  
 ③八才上(一六四) 遍照寺の承仕法師。／④下(一五六) 此人東寺の門に雨やどり  
 ⑤一四才上(一七七) 世に心えぬ事のおき也。：聲のかぎり出して／⑥下(一八六) 相模守時頼の母は。  
 ⑦一九才上(二一七) 平の宣時朝臣老ののち／⑧下(二〇八) 徳大寺の右大臣殿。  
 ⑨二四才上(二三三) 菌の別當入道は／⑩二四才下(二二〇) 狐は人にくひつく物也。

序文は次の通り。ただし振り仮名は一部を除き省略する。

此つれく草は吉田兼好折にふれ時に臨て書捨し筆ずさ

みなれば何に思ひよれりといふさだかなる事はなしそこはかと

なく書つくればといふにてしるべし草紙の大体は源氏物語の詞

を用ひ清少納言が枕草紙をうつしたる也然るゆへ清紫の二女の筆

意をふまへ台教を根本として生死無常を觀じ或は老莊の

寓言を假てうき世のさまを説顯し又は時序風景をもてあそび

男女のわりなき情の道をも捨やらす彼になぞらへ此によそへ有無うむ

の間あひだに出入しゆつにうすといへども其意こころを立たつる所を察すれば皆日用に便有て  
 悪をこらして善をすゝむるもの也然るに此書を儒者が講ずれば五

常の旨に取なし仏者かよむ時は釈教仏見にいひ落し歌学者は

詞花言葉をかざりて歌の道にいひ課おす是銘々の好む方に引れ

一偏になづむゆへなり兼好が心はいつれの道にも人の教となるへき事

がらを書あつめ己が本意を現す也此書を見る人此意味をあぢはふべし

下冊最終丁左肩には福地書店（群馬県伊勢崎市上泉町二八二の五）のラベルが貼られている。当書店から購入、昭和六二年八月一八日に本館に受入れられたものである。

## 2 注釈書類

(1) 徒然草壽命院抄 古活字本 貴重書／五九四・五九五

四ツ目袋綴装で縦二七・六×横二〇・一cm。灰色表紙。上巻九六丁、下巻五三丁。漢字片仮名交じり文。字数は二三二字から三〇字程度。外題は後補で「つれつれ草巻上（下）」と左肩に墨書題簽を貼る。内題・尾題ともになし。柱刻は「徒抄上（下）（丁付）」。匡郭は四周双边で縦二二・五×横一六・六cm（上巻第一丁は摺が悪いので第二丁による）。跋文は諸本にみられるものであるが、次のように中院通勝の筆になるものが記されている。

此書者壽命院立安法印凌醫家治療之暇廣

見遠聞而漸終篇予披覽最奇之餘揮短毫聊

## 録事状耳

慶長第六辛丑孟冬九日 也足叟素然

印記は本学図書館のもののほか、「秀／傳」(黒正方印・双边陽刻)、反町茂雄の「月明荘」、小汀利得の「をばま」がある。小汀は日本経済新聞社長で経済評論家でもあった。昭和四七年没。本館には本書のほかにも小汀文庫旧蔵本が所蔵されている。書入は墨書、朱筆で多々記されている。およそ同筆とみてよいだろう。また付箋も幾つか貼られている。朱筆では引用歌や各段の見出しを記すなど短文の注記をするほか、地名・人名・書名などに線を引いている。墨書では文章の長さに関わらず様々な注記を施している。また原文の誤字はどちらの色でも直してある。

ソコハカトクナ書ツクレハ(ナク(未))(上三オ二行目)

書入に用いられている主要な文献としては次のものが挙げられる。東鑑・伊勢物語・下学集・高士伝・古今集・三体詩・詩学大成・事文類聚・拾芥抄・職原抄・続古今集・続日本紀・新拾遺集・新千載集・荘子・続耳談・孫子・太子伝暦・太平記・長恨歌・風雅集・簞簞内伝・本朝文粹・万葉集・文選・維摩経・世継物語・礼記・老子・論語・倭名集など。このように充実しているが、これらは後続の諸注でもしばしば引かれる文献であるから、書入した人物がそれぞれを検索したというよりも、それらの諸注から孫引きしたものかも知れない。後考を俟つ。本郷の浅倉屋書店(現在は練馬に移転)から購入、昭和四九年二月二十九日受入。

(2) 徒然草鉄槌 四卷二冊 九一四・四五／二六／Ⅱ

五ツ目袋綴装。渦巻き模様牡丹の花紋を施した丹表紙。縦二七・〇×横一八・四cm。後補題簽を表紙左肩に貼る。

上冊「つれく／＼鈔 上一二」、下冊「徒然草鈔 下一二」。柱刻「鉄槌卷一（・四）（丁付）」。

本書は四卷仕立で、二巻は第六三段「後七日の」、三巻は第一二七段「花は盛りに」、四巻は第一八六段「吉田と申馬乗の」から始まる。各章段の文頭には合点を付けてある。ただし第一段（序分も含め）には付けていない。また全段にわたって章段番号を付けていない。ただし、本館所蔵本では旧蔵者によつて合点のわきに番号が付けられている。刊記は左記のごとく諸本と同じものである（第四巻最終丁ウラ）。

世間流布之本錯乱数多

有之今正文章倭点重令

於新刊者也

慶安貳年暮春吉辰

上冊最終丁ウラ左下に「巖松堂古典部波多埜扱斯書」の印記が捺してあるから、東京の巖松堂書店から購入したものである。昭和一二年一二月二一日、本館受入。

(3) 徒然草文段抄 九一四・四五／Ki六八／一

七冊。四ツ目袋綴装。万字繋ぎ牡丹唐草文の紺表紙。縦二五・六×横一八・四cm。外題は後補題簽に「徒然草文段抄四」（第四冊）と墨書してある。全冊に貼つてあるが、一〜三冊は磨滅が甚だしく、題名下の冊数が読めない。内題は第一巻巻頭一行目に「徒然草文段抄」とある。柱刻は「文段一（・七）丁付」。尾題は一〜六巻末尾に「徒然草文段抄」（第一冊は「徒然文段抄」とある。また第七冊本文末尾に「季吟抄」と記す。本文は一四行書。第一冊は「徒然草」の解説、兼好や題号について説き、本文の注釈に入る。「いてやこの世に」から第一段とする。第二冊は第二一段「よ

ろづの事は」、第三冊は第五二段「仁和寺のある法師」、第四冊は第九二段「ある人弓いる事を」、第五冊は第一三七段「花はさかりに」、第六冊は第一七五段「世にはこゝろえぬ事の」、第七冊は第二一五段「平宣時朝臣」から始まる。刊記は第七冊最終ドウラに左詰に次のようにある。

寛文七年十二月吉日

板行

(4) 徒然草諺解 九一四・四六／N四八／一

五卷五冊。五ツ目袋綴装の紺表紙。縦二六・八×横一九・一cm。外題は第四巻だけ原題簽で、「徒然草諺解 四」とある。四周双边で左肩に貼つてある。他の四巻はもと題簽のあつた場所に「徒然草諺解 一（一五）」と墨書。内題は「徒然草諺解卷一（一五）」と、各巻巻頭に記す。尾題は「徒然草諺解卷之一（一五）終」とある。柱刻は、序が「徒然序 丁付」、本文が「徒然一（一五） 丁付」となっている。章段は段ごとに改行し、冒頭に合点を付ける。構成は巻一が序から第四〇段「因幡国に」まで、巻二が第四一段「五月五日加茂のくらべ馬を」、巻三が第九四段「常磐井相国」、巻四が第一三七段「花はさかりに」、巻五が第一八六段「吉田と申馬乗の」から始まる。刊記は左記のよう  
に第五冊の巻末に双边の囲みの中に記されている。

寛文九己酉年林鐘上旬

猪熊通四條上ル町

中村五郎右衛門  
板開

著者は尾張の俳人清水春流で、序文に「寛文九己酉初秋の日尾陽清水春流筆を洛陽の旅館にとり侍るものならし」とあることから、完成後まもなく出版されたことが知られる。本館所蔵本には書入が豊富にあるが、鉛筆や赤鉛筆、

黒ペンなどによる近代のものが多い。なお、同版が本学日本文学資料室にも所蔵される（九一四・四五／N四八）。こちらは原題簽をもっており、それによると外題は「徒然草諺解 一（・五）」（四周双边）。また内題は、資料室本では巻一の内題がない。資料室本は戦前の心理学者黒田亮（昭和二二年没）の瘦松園文庫旧蔵本である。

(5) 徒然草大全 九一四・四五／Ta二八／一

上下二巻二冊。五ツ目袋綴装の紺表紙。縦二六・九×横一九・〇cm。題簽は原裝で「徒然草大全諸抄決談口傳註入上（・下六）」とある。梓は双边で表紙左肩に貼つてある。内題はない。尾題は各冊巻末左下に「決談終」などとあるほか、第七冊巻末に「徒然草上巻ノ決談終 第七終」とある。そして最終冊には「つれく草抄全部」とある。柱刻は「決（・下六）」（丁付）。序は一三行で、本文は一七行書。注釈部分は二字下げて記されている。章段は欄外上部に梓を設けて数字を記す。刊記は次の通り。

延寶五年

中西九郎左衛門板行

丁巳九月吉日

本書は高田宗賢の著。宗賢には他に『古語拾遺示蒙節解』などの著作がある。なお、見返の幾つかには反故を使用している。いずれも不鮮明で本文は判読しがたいが、下の巻六の後見返は本書上の巻六の第二六丁を使用していることが確認できる。広島市尾道町の第三書房から購入、昭和五年八月二日、本館受入。

(6) 徒然草参考 九一四・四五／四一

八冊。五ツ目袋綴装の紺表紙。縦二七・四×一九・四cm。題簽は原裝で「徒然草参考 一（・八）」とある。四周双

辺の枠で表紙の左肩に貼られている。内題は「徒然草参考一（一八）」、柱刻に題はなく、巻数と丁付とだけである。尾題は「徒然草参考卷之一（一八）終」。本文は一〇行書。注釈部分は細字で記す。章段は改行し、本文冒頭右肩に黒地白抜きの文字で番号を記す。構成は第一冊が或問（序）から第一九（参考Ⅱ一八）段「折ふしのうつりかはるこそ」まで、第二冊が第二〇（一九）段「なにがしとかや」、第三冊が第五〇（四九）段「應長の比」、第四冊が第八五（八四）段「人の心すなほならねば」、第五冊が第一二二（一二〇）段「やしなひかふものには」、第六冊が第一三七（一二六）段「花はさかりに」、第七冊が第一七五（二七四）段「世にはこゝろえぬ」、第八冊が第二一五（二一四）段「平宣時朝臣」から始まる。刊記は次の通り。

延寶六年<sup>戊</sup>  
午初冬吉辰

出水通日暮行當

板木屋九兵衛板行

延寶六年版にはほかに京押小路御幸町の西村七郎衛門末正・同七郎兵衛正光版がある。本館所蔵本には朱筆、鉛筆それぞれの合点や傍線、読点そのほか注記が見られる。また各冊前見返には目次を墨書した紙を貼ってある。ただし第一冊分は糊が剥がれている。なお「抄」の巻数と対照化しているが、この「抄」というのは『徒然草諸抄大成』を指している。

著者は紀州和歌山の浄福寺の住僧恵空である。恵空は多作家で、多くの著作を残している。本書で注意すべきは『壽命院抄』との関わりである。『壽命院抄』は諸注に引かれるものであるが、しかし、本書の場合はそれに加えて祖父祐念法橋が壽命院立安の講義を聴いており、恵空はその聞書を取り込んでいるのである。奥書によると、恵空は延寶三年の仏生日（四月八日）から『徒然草』の講義をしている。それを最終的にまとめたのが本書ということだろう。



## (7) 徒然草直解 九一四・四五／〇四四／一

上下二卷九冊。五ツ目袋綴装。薄茶色表紙。ただし下一前表紙のみ茶色表紙に改装している。縦二七・二×横一九・二cm。本文の匡郭は縦二一・七×横一六・三cm。本文料紙は冠考と本文・注釈との二段構成となっている。冠考は縦三・九cm、横一七・九cm（上一卷九オによる）。序文は九行、自序五行、本文は一四行書。自序には行間に縦線が引いてある。表記は本文が漢字平仮名交じりで、冠考の注は付訓の漢文もしくは漢字片仮名交じり文。外題は後補で「徒然草直解 上之一（・五）」とある。これは題簽のあった表紙左肩に直接墨書したものである。内題は「徒然草直解序」(序)、「つれく直解上卷二（・五）」(上卷)、「つれく直解下卷之一（・四）」(下卷)とあり、上卷第一冊はない。尾題は「つれく直解上卷之一（・五）終」、「つれく直解下卷之一終（・四大尾）」。柱刻「徒直解目付」(序)、「徒直解目 又二二(自序)」、「徒直解目卷一 (丁付)」(本文)。刊記はないが、序に年が明記されている。

貞享三稔龍輯丙寅秋八月六日梅林（福住道祐序）

今歳丙寅秋八月（自序）

岡西惟中は江戸前期の学者で大坂在住していた。一時軒、また閑閑堂とも号した。『易経』『詩経』『論語』『孟子』を講じ、聴講者も多かったという。

## (8) 徒然草諸抄大成 九一四・四五／A八四

二〇巻合五冊（もと一〇冊）。四ツ目袋綴装。亀甲繋ぎ牡丹唐草紋の紺表紙。縦二五・九×横一八・八cm。外題に「徒然草諸抄大成 卷（・五）」とある。原装の双边の枠をもつ摺題簽だが、冊数は墨書して加えてある。本来一〇冊本



であったが、後人が二冊ずつ合して五冊本とした。内題「徒然草諸抄大成」。柱刻「徒然大成卷一（・廿） ○（丁付）」。注釈書としての尾題はないが、『徒然草』本文を上下巻に分ち、上巻の尾題は付けている。すなわち第一巻の最終丁末尾に「徒然草上巻之終」とある。下巻にはない。各分冊の収録巻数は第一冊が巻一から巻四まで、第二冊が巻五から巻八まで、第三冊が巻九から巻一二まで、第四冊が巻一三から巻一六まで、第五冊が巻一七から巻二〇までとなっている。本書は基本的に冠考部分と本文部分との上下二段の構成となっている。冠考部分は縦八・五cm、本文部分は縦一四・五cm。無刊記。章段は黒地に白抜きの文字で欄外上部に記す。昭和四年八月二〇日、本館受入。

【追記】このほか、本館には版本で今回紹介していないものもあるほか、古写本や兼好伝の類もある。また日本文学資料室には各種注釈書が所蔵されている。